エッセイ

臨床と臨地と臨機応変力

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）
Toji KAMATA

前任校の京都造形芸術大学から京都大学こころの未来研究センターに異動して５年半になる。前任校では、主に、宗教学、民俗学、地域文化演習、環境文化論、文明論などを担当していたが、京都大学に移ってきてからは、研究業務の他に、教育業務として教育学研究科の大学院の授業の「臨床教育学演習」とか学部の「こころの科学」やポケットゼミ「沖縄・久高島研究」とかを担当するようになった。概論・概説的な総合的科目からより専門的な科目を担当するようになったわけだが、内容的な面から言えば、変化のポイントは「臨床」という概念と事態にあった。

かつて宗教学者の島薗進氏は、山折哲雄氏や中沢新一氏や島田裕巳氏やわたしを、体験主義的・身体的な「内在的理解」を求めようとする「宗教学」を推進する者と評した。拙著『宗教と霊性』（角川選書、1995年）では、この島薗氏の評に、それは大枠として間違いとはいえないけれども、各自の体験主義的・身体的・内在的理解の「質的差異」に慎重に目を向けなければならないのではないかと抵抗していたものだが、今になって考えると、これは「臨床的宗教学」の探究であったといえるかもしれないと思う。

そもそもこの「臨」という文字は会意文字で、部首（旁）の「臣」は下に伏せてうつむいた目を描いた象形文字であるという。そこで「臨」という字は「臣（伏せ目）＋人＋いろいろな品」という組み合わせになり、人が下方の物を見下ろすさまを表わすとされた。ここから「臨」は「下を見る」「面と向かう」「物事や時期に当面する」「他人の来ることを表す敬語」「死者のところに集まって泣く・その儀式」などの意味で使用されるようになったという。

とすれば、文字の観点から「臨床」の「臨」を分析すると、①下方性と②内部性と③場所性と④千差万別性の４つの相を持っているといえる。つまり、伏し目になって下の方を見るということは、より内なるものを覗き込むことでもあり、今ここのこの特定の場所に近接することであり、具体の差異に迫ることである。

加えて、意味の面から考えると、「臨床」は①試合と②遊びの対極的内容を持つと位置づけることができる。試合とは１回こっきりの真剣勝負で、その緊張感は半端なものではなく、ひりひり、ぴりぴりと痛いほどだ。一方、遊びは何度も自由に繰り返しリラックスして行うことができ、ふわふわ、あわあわとして、楽しい。

「臨床」とは、ニコラウス・クザーヌスの「反対物の一致」ではないが、この２つの極を振幅として持っているのだ。

わたしは17歳で「聖地巡礼」に目覚め、その後、意識的に「聖地・霊場」と呼ばれる場所を巡り始めた。これもまた振り返ってみれば「臨床」的関心であったといえる。

国内外の「聖地・霊場」とされる場所を45年も廻っているうちに、この「臨床」的研究と聖地巡りのような「臨地」的研究には共通項があるとはっきりと感じるようになった。それは、「臨床」の場でも「臨地」の場でも何が起こるかわからない、何が飛び出してくるかわからないという不測・不可測の共通点である。偶然的なハプニングとも事故的なアクシデントともいえる、いきなり、突如、過剰な予測不可能の事態の生起である。

そのような不可測の事態の生起を「超越性」と呼びたい。そこで、「臨床」や「臨地」に関わる者は、その不可測の事態に瞬時に対応・対処する「臨機応変力」が問われることになる。この「臨機応変力」の涵養こそがこの種の学問的研究のキモである。

それでは、「臨機応変力」とは何か？　それを、①不動心（無心）、②身体反応への信頼と忠実、③関係性把握と最適維持、④カウンターバランス、⑤極道性、とひとまず輪郭づけてみたい。何事が起こっても動ぜず、無意識に起こる身体反応に注意深く寄り添いながら対処し、関係性の組み換えとカウンターバランスの中での最適保持を瞬時に判断し、しかし、どんな破局が訪れても恐れることのない諦めと覚悟を持つ、ということ。そんな「臨機応変力」を磨きたいものだといつも思っています。

参考文献

鎌田東二『宗教と霊性』角川選書、角川書店、1995年
鎌田東二『聖地感覚』角川学芸出版、1998年（2013年角川ソフィア文庫。解説・内田樹）
鎌田東二編『日本の聖地文化』創元社、2012年

対馬：和多都美神社の海中鳥居